ホワイトレディー

平和のシンボル

春日信彦

話せば分かる

長崎で人気急上昇中の白いハトたちは、ホワイトレディーと子供たちに呼ばれ、今日も観光客のために平和祈念像の左手甲の上でカメラ目線のキュートなポーズを披露していた。ミーはケイにささやいた。「ね～、この前、祈念像の頭の上で胸を突き出して、偉そうにふんぞり返ったブサイクな白いハトを見たのよ。ケイは見たことない？」ケイは、首をかしげ、返事した。「見たことない。ブサイクって？」ミーは、小さくうなずき、話し始めた。「ハトにしては、バカでかいのよ。大きさは、カラスぐらい。ハトの十倍ぐらいある真っ黒いくちばしでさ～。そうね～、真っ白いカラスのようなブクブク太った白いハト、と言えばいいのかな～」

ケイは、またもや首をかしげて返事した。「バカでかくて、ブサイクな真っ白いハトか。そんなハトは見たことないよ。それって、ハトじゃなくて、サギの親戚じゃない？」ケラケラとミーは笑った。「サギ？それは違うわよ。あんなブサイクで下品なサギは、いないわよ。しかも、ブッチョくて、足は、短いんだもの。あ、もしかして、アメリカからやってきた肥満のハトかも。ハンバーグの食べすぎかもね」

今度は、ケイが大声でハハハと笑った。「え、ハトは、肉食じゃないでしょ。もしかして、遺伝子組換えトウモロコシの食べ過ぎで、肥満になったんじゃない。きっと、そうよ」ミーは、大きくうなずき、納得したような顔で話し始めた。「でも、食べ過ぎで肥満になるのは分かるけど、クチバシまで大きくなるのかしら？不思議だわ～」ケイも、うなずいた。「そう言えば、そうね。クチバシがバカでかいと言うことは、新種のハトと言うことよ」

ミーは、大きくうなずき、同意の返事をした。「そうね。日本には、あんなに大きなクチバシのハトはいないから、きっと、アメリカにしかいないハトね。最近、品種改良された白いハトよ。もし、アメリカに戦前からいたなら、もっと早くに日本にやってきたと思うんだけど。そう思わない？」ケイは、首をかしげた。しばらく考え、話し始めた。「確かに、やっぱ、最近作られた新種の白いハトじゃない？遺伝子組換えをされたハトかも？」

　ミーは、フム、フムと二度うなずき、話し始めた。「なるほど、なるふど、遺伝子組み換えか。体の大きさを考えると、もしかしたら、ブサイクな白いハトは、カラスの遺伝子組み換えによって作られた白いカラスじゃない。白い羽を真っ黒にしたなら、カラスじゃない。人間がやることったら、下品極まりないから。ブサイクな白いカラスを作って、私たちのようなカワイ～白いハトを皆殺しにしようと思っているんだわ。人間って、陰謀が好きだから。きっと、そうよ」

　ケイは、ちょっと首をかしげ、疑問を投げかけた。「でも、どうしてかしら。平和には、カワイ～白いハトのほうが、似合っていると思うんだけど。ブサイクな白いカラスなんて、平和には、似合わないわよ」ミーは、目をキョロキョロさせて、返事した。「だから、人間は、何かたくらんでいるって、言っているじゃない」ケイは、きょとんとした顔でたずねた。「いったい、どんな陰謀？」

ミーは、頭をクルクル回して考え、ひらめいたかのように答えた。「だから～、陰謀じゃない。ほら、あ、そうだわ。平和って、暖かくて、純潔で、私たちみたいにカワイ～イメージじゃない。そこよ、平和のイメージを変えようと思っているんだわ。平和は、ブサイクで、不潔で、とっても醜い、って言うイメージにしようと、たくらんでいるのよ。きっと、そうよ。現に、平和な日本に、不潔な原発をいくつも作っているじゃない」

ケイは、まったくわけが分からないと言う顔でたずねた。「それって、こじつけじゃない。人間が、どんなに賢いって言っても、そんな手の込んだことはやらないでしょう。やっぱ、カラスの嫌がらせだと思うわ。白くてカワイ～私たちへの嫌がらせに違いないわ。黒い羽を白く染めているにきまってる。きっと、カワイ～私たちに嫉妬してるのよ。カラスは、頭はいいけど、心は、人間みたいに、下品って事よ」

ミーは、小さくうなずき、腕組みをして答えた。「そうか、カラスの嫉妬ね。それも、一理あるわね。私たちが、かわいすぎるのが、問題ってことね。ほんと、ミーとケイは、カワイ～ものね。私たちって、かなり人気があるみたいよ。修学旅行でやってくる子供たちなんか、私たちのこと、カワイ～、カワイ～、って言ってるし。カワイ～って、ちょっと罪作りかしら。カラスのねたみをかっているんだものね」

ケイは、少し心配になってきた。「カワイ～白いハトって、これからイジメられるんじゃない。黒いカラスからだけでなく、腹黒い人間からも。人間んって、私たちみたいに純潔じゃないでしょ。だから、かわいくて、真っ白で、純潔の私たちをねたむと思うの。怖くなってきた。きっと、白いハトは、腹黒い人間に皆殺しにされるわ。そして、ブサイクな白いカラスを平和のシンボルにすり替えるに違いないわ」

ミーは、子供たちに聞こえるほど大きな声で諭すように話し始めた。「ケイ、そんなに怖気つくことはないわよ。カワイ～私たちは、子供たちという強い見方がいるじゃない。子供たちは、ちゃんと分かっているのよ。白いハトが平和のシンボルだってことを。でも、あんな、ブサイクな白いカラスが、これから増えると思うと、気味が悪いわね。いやだわ～、寒気がしてきた」

ケイも、ブルブルと身震いした。おなかがすいたミーとケイが我が家に帰ろうと翼を少し持ち上げたとき、ゴホン、ゴホン、と大きな咳払いが頭上に響き渡った。二羽が、右上に目をやると、祈念像の頭上で、今うわさしていた白いカラスが腕組みをして二羽をにらみつけていた。キャ～～、ケイが悲鳴を上げた。そのとき、白いカラスは、やさしく声をかけた。「ちょっと、君たち。自分勝手な解釈は、いかんな～。俺は、君たちに危害を加えるつもりもないし、ねたみもまったくない。そんなに、怖がることはない」

ミーは、さっきは言い過ぎたと思い、即座にペコペコ頭を下げた。「ごめんなさい。悪気はなかったんです。ごめんなさい、許してください」ミーとケイは、何度も、ペコペコと頭を下げた。ブサイクな白いカラスは、とにかく誤解をとくことにした。「ま～ま～、そんなに、頭を下げられても困る。君たちが誤解するのも、もっともだ。こんな白いハトのような白いカラスは、この世の中で、俺一羽だからな」白いカラスは、ワハハハと大声で笑った。

ミーは、ほんの少しほっとしたが、ケイは、まだ、ブルブルと震えていた。ミーは、とにかく謝ることにした。「ブサイクだなんて、取り消します。優しい方なんですね」誤解された白いカラスは、自己紹介をすることにした。「まあ、俺を見て、びっくりしないハトは、いないさ。俺は、江戸からやってきた白いカラスさ。両親は、黒いんだが、なぜか、俺だけは、白いんだ。まあ、突然変異というか、奇形というか、俺にはよくわからん。つまり、俺は、ハトじゃない。正真正銘のカラスだ。だからといって、人間のように、ハトを食うほど下品じゃない」

ケイには、奇妙な白いカラスは、なんとなくやさしそうに思え、食われることはなさそうで、ほっとした。ケイが、勇気を出して話しかけた。「こちらはミー、私はケイ。カラスさんのお名前はなんとおっしゃるのですか？」問いかけられた白いカラスは、ほんの少し笑顔を作り答えた。「名前というほどではないが、友達の猫は、俺のことを風来坊と呼んでいる。江戸からやってきた旅ガラスだから、そんなところじゃないか」

ミーとケイは、まだ、賢そうな白いカラスが信用できなかったが、話せば分かり合えるように思えた。カラスは、雑食だから、ハトを食べないとも限らなかったが、万が一襲いかかってきたならば、一目散に逃げる心積りはしていた。ハトたちは、カラスが鳥類の中では、もっとも賢く、残虐であることを知っていた。人類をアホ～、アホ～、とののしり、鬱憤晴らしに、原発めがけてフンの爆弾を投下していた。

ミーは、口調の優しい風来坊に少し関心がわいた。いつでも食ってやるぞと言わんばかりの目つきをしている黒いカラスと違って、もしかして、白いハトに好感を持っているんではないかと思えた。また、猫の友達がいるということからすれば、この風来坊には、不思議な友好能力があるように思えた。ミーも猫や犬と友達になりたいと思ったことがあったが、なぜか、話し合う前に襲われるのだった。この際、風来坊にいろんなことを質問することにした。

「さっき、猫のお友達がいるといわれたけど、びっくりしちゃった。どうやって、お友達になったの？」風来坊は、二羽の白いハトがなんとなくかわいく思えてきた。ほとんどのハトは、怖気づいてさっさと逃げていくのが落ちだった。やはり、共通する白が、白いハトの気持を変えていると思えた。風来坊は、子供のころから白い自分にコンプレックスを持っていたが、それは、黒を常識とするカラスの世界のことであって、世間一般では、白は好感を持たれる色であることを、今、身にしみて分かった。風来坊は、なんとなく、愉快になってきた。

「ああ、上品な猫ややんちゃな犬の友達がいる。俺は、ほかの黒いカラスと違って、好かれるみたいだ。きっと、俺が白いからだろう。それと、俺は、おしゃべりが好きなんだ。思うんだが、動物は、お互い仲良くすべきだと思う。むやみやたらと殺しあうのは、愚の骨頂じゃないかな。人間の殺し合いを見ていると、つくづくそう思うんだ。人間は、カラスと同じぐらい賢いと思うんだが、心根がどうもよろしくない。殺し合いを娯楽にしちゃいかんよ」

ミーとケイは、何度もうなずきながら風来坊の話に耳を傾けていた。気の弱いケイは、小さな声で風来坊に話しかけた。「風来坊さんは、すごく賢いんですね。ハトは、難しいことは分からないけど、風来坊さんは、頭がいいだけでなく、とっても優しい方だと思います。ぜひ、この機会に、私たちとお友達になってください」風来坊は、大きくうなずき、返事した。「いいとも、今度、糸島に遊びに来るといい。猫のピース、犬のスパイダー、子供の亜紀ちゃんを紹介するから」

最も怖いと思っていた犬ともお友達と聞いたケイは、小さな目をパチクリさせて尋ねた。「あの、よだれをたらして追いかけてくる野蛮な犬とお友達なの。風来坊さんって、人間みたいだわ。ハトには、そんな勇気はないわ。ハトって、とっても臆病なのよ。ツメを立てて襲い掛かってくる猫やワンワン吠えて追いかけてくる犬とお友達になるなんて、奇跡みたいだわ。今度、遊びに行こうかしら、ね、ミー」ミーも笑顔でうなずいた。「ワクワクするわね。どんなお友達かしら」

風来坊は、ドヤ顔になると胸を張って話し始めた。「猫も犬もカワイ～ものさ。誰しも、先入観を持ちがちだが、じっくり話し合えば、友達になれるものさ。君たち白いハトは、平和のシンボルだから、すぐに友達になれるさ。彼らは、すっごく、気持のいいやつばかりだ。いつでも、来るがいい。君たちのようなカワイ～友達は、大歓迎だ」平和のシンボルと言われたミーとケイは、パッと笑顔になり、カッチ、カッチとカワイ～音色を響かせながら、得意のタップダンスを踊った。

ケイは、友達を連れて、糸島に行ってみたくなった。「ね～、ミー、浦上天主堂の彼女たちも連れて、糸島に行ってみようか。風来坊の友達って、どんな方たちかしらね。興味津々ね」ミーは、笑顔でうなずいた。ケイは、ミーの同意を得たことで、気持が楽になり、さわやかな美声で風来坊に声をかけた。「ね～、さっきの糸島のことだけど。私たちの友達を連れて、行っていいかしら」

風来坊は、即座に笑顔で答えた。「いいとも、何羽でもいいさ。日帰りでも、泊まりでも、どんとこい。亜紀ちゃんは、とっても、友達思いなんだ。君たちがやってくるとわかれば、ご馳走してくれるはずだ。いつ、遊びに来る？」ミーとケイは、お互い見詰め合った。ミーは、早速、友達の都合を聞いて返事することにした。「急な話だから、友達と相談してみる。明日の朝には、返事できると思うから、明日、午前７時にここでまたお会いしましょう。風来坊さんは、今日は、泊まりでしょ」

長崎の友達のところに泊まることにしていた風来坊は、元気よく返事した。「そうさ、今夜は、大村湾を仕切っているキヨシって言う友達のところで厄介になることになっている。明朝、７時、この平和祈念像だな。分かった」ミーとケイは、ちょっとした糸島への小旅行を思い浮かべ、笑顔を作り、青空にパタパタと飛び立った。風来坊も二羽を見送ると、大村に向かってバサバサと飛び立った。

心遣い

午前６時に大村を出発し、のんびりと風に揺られやってきた風来坊は、７時前には、平和祈念像の頭上に着陸した。首を大きく回転させ、両足のストレッチ運動をしていると、二羽の白いハトが青空をバックに南側から現れた。フワッと祈念像の左手の甲に舞い降りると、ケイは、黄色い声で風来坊に話しかけた。「おはよ～～、待った？」

風来坊は、早速、糸島観光の返事を聞くことにした。「いや、今来たところさ、そう、糸島のことだけど、お友達はどうだった？」ミーとケイは、見詰め合って、同時に返事した。「ＯＫよ、明日だったら、都合がいいんだって」風来坊は、笑顔で答えた。「そうか、明日だな。何時ごろ、糸島に到着しそうかな？」ミーは、即座に答えた。「長崎を８時ごろ出発するから、９時ごろには、到着すると思う。でも、糸島のどこに行けばいいの？」

風来坊は、大きな声で返事した。「糸島の仲間に連絡しておくから、心配ない。君たちを見つけたら、仲間が案内するさ。気兼ねなく、来るといい。何羽でくるんだい？」ミーは、透き通る声で返事した。「５羽よ。全員、白いハトだから、ちゃんと見つけてね」風来坊は、うれしくなって、脳のてっぺんから甲高い裏声で答えた。「もちろんさ。すぐに見つけて、案内するから、安心するがいい」

ミーとケイは、そろってうなずくと返事をした。「それじゃ、明日は、お願いね。糸島の友達にもよろしく言っておいてちょうだい。早速、天主堂の友達に伝えにいくわね。きっと喜ぶわ。そいじゃ、明日お会いしましょう」二羽は、パタパタパタパタと飛び立つと南の空に消えた。うれしくて心が弾んだ風来坊もブワッブワッと翼を力強く動かして、北の空に消えた。南風に乗った風来坊は、一時間もしないうちに糸島に到着した。

風来坊は、平原歴史公園の上空をグルッと旋回し、ピースの姿を探したが、庭にも公園にもいなかった。家の中でテレビでも見ているのではないかと思い、しばらく、屋根の上で待つことにした。９時を過ぎたころピースがベランダに現れた。すぐさま、リビングから流れてくる軽快なリズムに合わせて、なにやら奇妙な全身運動をはじめた。風来坊は、世にも不思議なネコ・ダンスが終わるのを待って、明日、長崎から友達が来ることを伝えようと思ったが、いてもたってもいられなくなり、ベランダに向かって舞い降りた。

庭のピンクのテーブルの横に舞い降りると、ハイテンポな音楽に負けないように大きな声でピースに話しかけた。「おはよ～、ピース。楽しそうじゃないか。ストレス発散に、阿波踊りでもやってるのか？」ピースは、音楽が終わるまで風来坊の声が聞こえていないふりをしてシェイプアップ・ダンスを踊り続けた。風来坊は、ピースを怒らせては、友達のことを話しづらくなると思い、しばらく、首を回したり、背筋を反らしたり丸めたり、足を震えさせたり、尻尾をぐるぐると振り回したり、とへんてこりんなネコ・ダンスをテーブルの下でじっと眺めた。

音楽が止まるとピースのダンスも即座に止まった。ダンスに満喫したようなピースは、最後に、大きく背筋をそらし、大きなあくびをすると、風来坊をギョロッとにらみつけた。「ちょっと、阿波踊りだなんて、失礼しちゃうわ。シェイプアップ・ダンスをやってるんじゃないの。猫は、日々、美容には気を配ってるのよ。あんた達とは、生まれながらに、美意識が違うの。あんたも、もう少しは、美に関心を持ちなさい。食っちゃね、食っちゃね、していると、そのうち、ブタカラスになるわよ」

ブタカラスと言われた風来坊は、痛いところを突かれ、グサっときたが、ここで、喧嘩を売っては、今までの友好関係が台無しになると思い、ぐっとこらえた。そして、大きく深呼吸し、冷静さを装い、ピースにやさしく話しはじめた。「ごもっとも、ピースさんのおっしゃ通り。最近、ちょっと太り気味だとは、思っていたところです。ピースさんを見習って、シャイプアップ・ダンスとやらをやってみますか」

今まで素直なことを言ったことがなかった風来坊の異変に、何か魂胆があるなと感じ取ったピースは、早速、風来坊の本音を探ることにした。「あら、今日は、しおらしいことを言うじゃない。私に、何かお願いでもあるの？」風来坊は、鋭いピースの直感に一瞬ひるんだが、にっこりと笑顔を作り、明日のことを話すことにした。「ピースさん、ちょっと、お話いいですか？」

ピースは、改まった口調の風来坊に面食らってしまった。こんなに丁重な態度を見たのは、初めてであった。「そんなに、かしこまらなくってもいいわよ。なによ、話って？」風来坊は、もう一度大きく深呼吸して話しはじめた。「いや、かしこまるほどのことではないんですが、長崎のお友達が、明日、糸島にやってくるんですよ。そのとき、ピースさん、スパイダー、亜紀ちゃんを紹介したいと思っているんだけど、ちょっと、時間をとってもらえないかな～」

長崎のお友達と聞いて、首をかしげた。お友達というのは、当然、カラスだと思ったが、念のために聞いてみた。「お友達って、カラスなの？」風来坊は、首を左右に振り、苦笑いをしながら答えた。「それが、カラスじゃなくて、とってもカワイ～白いハトなんだ。５羽でやってくるんだ。できれば、亜紀ちゃんが、ご馳走をしてくれるとうれしいんだけど。ピースさんから、亜紀ちゃんにお願いしてくれないだろうか？」

にやけた顔をした風来坊のお願いを聞いて、なんとなく察しがついた。おそらく、長崎までナンパに出かけ、カラスをナンパしようと思ったところ、白いものだからハトに気に入られ、調子に乗ってハトをナンパしたに違いない。「へ～、カワイ～白いハトね。カラスが、ハトをナンパするとは、初耳だわ。ハトもハトね、見る目を疑っちゃうわ」

風来坊は、顔をブルブルと左右に激しく振り、弁解した。「ナンパだなんて、とんでもない、単なるお友達さ。彼女たちは、ピースさん、スパイダー、亜紀ちゃんとお友達になりたいそうなんだ。明日の９時ごろには、糸島に到着すると思う。よろしく頼むよ」ピースは、疑いの眼差しで風来坊をチラッと見て、返事した。「ま、いいけど。そう、でも、明日は、水曜日でしょ。亜紀ちゃんは、学校よ。帰ってくるのは、夕方かな」

風来坊は、面食らってしまった。当てにしていたご馳走がふいになり、彼女たちになんと言って弁解すればいいか戸惑ってしまった。泣きそうな顔になった風来坊が気の毒になったのか、ピースが話を続けた。「そんなに、がっかりすることはないわ。亜紀ちゃんには、ハトのえさをご馳走してもらえるようにお願いするから。風来坊が好きなポップコーンとパンもお願いしてあげるから。そう、亜紀ちゃんが帰ってくるまで、糸島を案内してあげればいいじゃない」

突然げんきんになった風来坊は、ぴょんぴょんと跳ねて、お礼を言った。「ありがとう。やっぱ、ピースさんは、猫の中の猫ですね。恩にきります。亜紀ちゃんが、学校から帰ってくるまで、糸島の観光スポットを案内しますよ」ピースは、夕方、亜紀ちゃんが学校から帰ってきたら、明日、長崎からやってくる風来坊の友達のことを話すことにした。「遠路はるばる糸島まで遊びにやってくるんだもの。しっかり、おもてなし、しなくっちゃね。亜紀ちゃんも、きっと、風来坊の気持、分かってくれるわよ」

風来坊は、その言葉を聞いて、人生バラ色になったようで、翼を大きく広げ、パタパタとピースに感謝の思いを伝えた。「ピースさん、本当にありがとう。一生、恩にきるよ。そいじゃ」瞳を輝かせた風来坊は、ジャンプしながら舞い上がると、南の空に消えた。ピースは、早速、スパイダーに明日のことを話すことにした。スパイダーは、朝ごはんを食べて、アンナの大きなお尻について回っていた。

リビングに戻ったピースは、スパイダーに声をかけるタイミングを計っていた。アンナがトイレに入りドアをバタンと閉じると、スパイダーは、リビングのピースのもとにやってきた。ピースは、アンナがトイレから出てこない間に、スパイダーに明日の件を話すことにした。ワイパーのように尻尾を振りながらソファーに両手を伸ばして寝転んだスパイダーにそっと話しかけた。「スパイダー、ちょっと話があるの。ベランダに来てくれない」

スパイダーは、ピースのやさしい口調に首をかしげ、小さくうなずいた。ピースの後に続きスパイダーがベランダに下りると、ピースはお座りして話しはじめた。「さっきね、風来坊がやってきたのよ。何かと思ったら、明日、風来坊のお友達が長崎からやってくるんだって。そんでもって、私たちと亜紀ちゃんを紹介したいらしいのよ。だから、ちょっとだけ、付き合ってほしいの。いいかしら」

亜紀ちゃんのことだと思っていたスパイダーは、拍子抜けの話に、小さくうなずいた。「そんなことか。別に、いいけど。友達って、黒いカラスか？」ピースは、即座に答えた。「それが、びっくりしないでよ。なんと、カワイ～白いハトなのよ。どんな手を使って、ナンパしたのか知らないけれど、長崎からはるばるやってくるんだって。よろしくね。亜紀ちゃんには、学校から帰ってきたら、話すつもりだけど」

スパイダーは、生意気な風来坊のことを親友とは思っていなかったが、友達がやってきたときぐらいは、愛想よくしてやることにした。「あ～、カワイ～ハトが遠路はるばる長崎からやってくるんだろ。愛想よく、振舞うさ。何時ごろ来るんだ？」ピースは、分かってくれたスパイダーに笑顔を作り答えた。「朝、９時ごろにやってくるみたい。亜紀ちゃんは、いないから、夕方まで、糸島めぐりをするんだって」

スパイダーにとっては、ハトとカラスがなにをしようと関係ないと思ったが、亜紀ちゃんが、遠路はるばるやってきたハトたちにご馳走を振舞うのではないかとふと思った。この際、犬へのご馳走をねだることにした。「亜紀ちゃんは、太っ腹だから、ハトやカラスにご馳走をふるまうだろうな～、できれば、僕たちにもご馳走してほしいよな～。ピースもそう思うだろ」

ピースは、ご馳走をねだるのは、猫としてはしたないと思えたが、スパイダーの機嫌を取るためにうなずいた。「そうね、亜紀ちゃんにお願いしてみようかな。期待して、待ってなさい」スパイダーの頭に、おいしそうな佐賀牛がふんわり浮かびあがると、うっかりよだれを流してしまった。あきれたピースは、ひげをピクピクさせていやみを言った。「スパイダー、勘違いしないでよ。あくまでも、長崎のお友達をもてなすんだからね。調子にのって、がっつくんじゃないわよ」

長い舌で黒い鼻をなめると、ちょっとうなずき返事した。「分かってるさ。そんなことぐらい。明日が、待ちどうしいな～」食い意地の張ったスパイダーにあきれたピースは、そっと立ち上がり、ゆっくりとやわらかい足取りで、お尻をフリフリしながら、リビングに戻った。スパイダーは、アンナを思い出したのか、ガシ、ガシ、と大きな足音を立てキッチンにかけて行った。

ウェルカム糸島

翌朝、５羽のホワイトレディーは、平和祈念像の左手甲の上に集合した。全員、平和祈念像にオハヨ～～、と挨拶した。ホワイトレディーとカラスが話していたのを盗み聞きしていた祈念像のマッチョは治安がますます悪くなっている人間社会のことを考え、ちょっとだけ忠告した。「気をつけて行ってらっしゃい。君たちに怪我でもされたら、祈念像の人気が落ちるんだから。ちょっとでも、危ないと思ったら、一目散に逃げるんだよ。最近、平和を嫌うテロリストが、白いハトを撃ち殺しているそうだから。人間を甘く見ちゃだめだ。人を見たら盗人と思え、って言うだろ。油断大敵だよ、分かったね」

ホワイトレディーは、大きな声で、ありがとう、と返事した。ミーは、祈念像に今回の糸島旅行について話した。「今度の旅は、白いカラスさんの招待で、糸島なの。地元のカラスさんたちが道案内してくれるそうだから、安心だわ。カワイ～猫や陽気な犬のお友達が、歓迎してくれるんだって。マッチョさんには、旅先での楽しかった出来事の話を手土産に持って帰ってくるから、キリンさんのように、首をなが～くして、待っててね」

マッチョもホワイトレディーたちと一緒に旅行したい気持でいっぱいだったが、カラ元気を出して返事した。「君たちが無事に帰ってくることを祈っているさ。僕は動けなくとも、ここからじっと君たちを見守っているから、安心して、遊んでくるがいい。風に乗れば、糸島なんて、あっという間に着くんじゃないか。グッドラック」ホワイトレディーのリーダーのミーは、いつものカワイ～チェックを始めた。「ケイ、ラン、スー、ミキ、みんなカワイ～かな？」

ホワイトレディーは、お互いの笑顔を確認すると大声でカワイ～と叫んだ。いってきま～す、と叫ぶとパタパタと翼を響かせ大空へ舞いあがった。マッチョは、笑顔を作り、キョロキョロと周りを見回した。誰も見ていないのを確認したマッチョは、右手を左右に大きく振った。ホワイトレディーは、大村（おおむら）、嬉野（うれしの）、武雄（たけお）の緑の山々を眺めながら、南風に乗り、北東に突き進んだ。彼女たちは、ペチャクチャおしゃべりしていると、あっという間に糸島二丈の上空まで流されていた。先頭で飛んでいたミーは急ブレーキをかけて、あたりを見渡した。

ミーは、キョロキョロとあたりを見渡していると東の空に小さな黒い物体を発見した。小さな黒点は、次第に大きくなりカーカーと歓迎の声を発した。ホワイトレディーに近づいたカラスは、歓迎の挨拶をした。「こんにちは。長崎からのお友達でいらっしゃいますね。お待ちしていました。ご案内いたします。さあ、参りましょう」ホワイトレディーは、この黒いカラスは、白いカラスの仲間だと思い、後をついて行くことにした。

ミーは、どこまで行くのか尋ねた。「どこまで、行くのですか？そこに白いカラスさんがいらっしゃるのですか？」カラスは、軽やかな声で返事した。「平原歴史公園です。すぐそこです。そこで、ピース、スパイダー、ボスがお待ちしています」その言葉を聞いたホワイトレディーは、ほっとしたのか、翼が軽やかになり、疲れも一瞬にして吹っ飛んだ。カラスを先頭に、その後ろにミーとケイ、さらにその後ろにラン、スー、ミキがきれいな正三角形を形作り、青空をバックにした空飛ぶ三角形は、追い風に乗り目的地に向かった。

二丈から前原に入り、小さなため池の南側にコスモスに彩られた平原歴史公園が現れた。その公園のブルーのベンチの前でお座りしているスパイダーとベンチの座席の上でお座りしているピースが、到着はまだかまだか、と心待ちにして青空を見上げていた。ベンチの横には、威風堂々としたヤマモモの木がどっしりと構えていた。そのヤマモモの木の枝がほんの少し揺れると、白いハトを発見した風来坊が、緑の葉っぱの中から勢いよく飛び出した。風来坊は、青空に向かって急上昇すると、カラスとハトの三角形を迎えに行った。

ミーは、即座に白いカラスと察知し、ラン、スー、ミキに伝えた。「お友達の風来坊さんよ」三羽は、近づいてくるハトのような白いカラスをじっと目を凝らして見つめた。風来坊は、仲間のカラスにご苦労、と言い放って、ホワイトレディーに挨拶した。「お待ちしていました。遠路はるばる、お疲れでしょう。すぐそこの公園でまでどうぞ」風来坊は、ピースとスパイダーが待っている公園めがけてゆっくり降下した。

二羽のカラスとホワイトレディーは、ベンチの前にフワッと着陸した。スパイダーは、カラスとホワイトレディーを目の当たりにして、小さな声でワンと挨拶した。早速、風来坊は、仲間を紹介することにした。「こちらが、いつも相談に乗ってくださっているピースさん、こちらは、用心棒のスパイダー君。残念ながら、僕たちをかわいがってくれている亜紀ちゃんは、学校だ。夕方には、帰ってくるから、楽しみに待っていてくれ」

ピースは、小さな笑顔を作り、挨拶した。「ようこそ、糸島にいらっしゃいました。ゆっくり、糸島めぐりを楽しんでください」早朝出立したホワイトレディーは、おなかがすいていた。ミーが、風来坊に声をかけた。「私たち、朝は、少ししか食べてこなかったのです。少しでいいですから、何か、食べさせていただけませんか？」朝食のことをすっかり忘れていた風来坊は、首をかしげ、つぶやいた。「そうですか？」

そのことを心得ていたピースは、すでに亜紀に相談していた。「ご心配なく。亜紀ちゃんからの差し入れです」ヤマモモの木の下にポップコーンとポテトチップスが入った袋がおいてあった。それは、今朝、亜紀が学校に行く前に準備しておいたものだった。ピースは、小さな口で袋の口をくわえ、ホワイトレディーの前に運んできた。「どうぞ、少しですが、食べてください」ホワイトレディーは、大好物のポップコーンに目を丸くしてクック、クック、と歓喜の声を発した。

ミーは、袋の底の端をくちばしで挟み、顔を左右に振った。袋の中から勢いよくポップコーンとポテトチップスが飛び出してきた。ホワイトレディーは、いっせいに頭を前後に動かし、えさを食べ始めた。カラスたちは、勢いよく食べるホワイトレディーの姿を見て、早朝に出発したために朝食抜きでやってきたのではないかと思った。ホワイトレディーは、えさを食べ終えると、満足そうな笑顔を作り、ケイが、お礼を言った。「ありがとう。とてもおいしかったわ」

ピースは、遠路はるばる長崎からやってきたホワイトレディーのガイドをしてやりたかったが、空を飛べる二羽のカラスにガイドをお願いすることにした。「ハトさんたち、少しお疲れでしょう。ここで、少し休憩なされて、カラスさんたちのガイドで、糸島巡りをなさってください。亜紀ちゃんは、夕方には帰ってきますので、そのときに、歓迎パーティーをやりたいと思っています。楽しみにしていてください。そう、今日は、亜紀ちゃんのおうちに泊まっていかれてはどうでしょう？」

ホワイトレディーは、お互い顔を見合わせてうなずいた。ミーが、代表で返事した。「それは、うれしいわ。ワイワイ、ガールズトークに花を咲かせましょう。よろしくお願いします」風来坊は、どこを案内しようか考えていた。きれいな海を見せたくなり、夫婦岩（めおといわ）のある“桜井二見ヶ浦（さくらいふたみがうら）”、日本三大玄武洞の中でも最大の“芥屋の大門（けやのおおと）”、野村望東尼（のむらぼうとうに）遺跡のある“姫島（ひめしま）”を案内することに決めた。

風来坊は、糸島巡りの前に平原遺跡（ひらばるいせき）の説明をすることにした。「皆さん、この公園には、平原遺跡があります。この遺跡は、日本最大の銅鏡をはじめ、豪華な副葬品が出土したことから王墓といわれています。しかも、アクセサリー類の多くが副葬されていたため、被葬者は女性ではないかと推測されています。つまり、糸島は、女帝が君臨していた伊都国と言えます。現に、卑弥呼女王が、糸島の女帝なのです。そうですね、ピース様」

ピースは、大きくうなずいた。「はい、伊都国は、弥生時代から女帝の国なのです。当然、女帝は、黒猫の卑弥呼女王様です。共生できない人間は、多くの争いを経て、現在の下品な社会を築き上げてきましたが、猫は、卑弥呼女王を中心に、共生の社会を築き上げてきました。今後、猫の共生文化は、次第に人間社会にも浸透していくことでしょう」ホワイトレディーは、猫の話になり、何のことやら分からなくなり、首を傾げてしまった。

目じりを下げ、きょとんとしているホワイトレディーを見た風来坊は、話をつなげた。「不思議に思われたでしょう。一般的に、伊都国には人間の女帝が実在したと言われています。確かに、人間が使ったものと思われる埋葬品が多く出土しています。でも、人間以上に高度な文化を築き上げてきたのは、猫様なのです。また、古代からカラスは、猫様にお使えしてまいりました。猫様の歴史と文化は、人間社会では、いまだ、研究されていません。今後、猫様の歴史が研究されたならば、日本の歴史は、大きく変わることでしょう」

歴史が得意でないホワイトレディーは、ますます、頭が混乱した。あまりにも難しい猫の話に困惑したミーは、ハトの立場の意見を述べた。「私たちハトは、歴史や政治経済が、苦手なのです。得意な科目は、音楽と地理です。難しい話は、猫様とカラスさんに任せます。ところで、子供の亜紀ちゃんは、学校に行かれているそうですが、そこで、何をしているのですか？」

亜紀ちゃんのことを聞かれ、ピースは耳をピンと立てた。「亜紀ちゃんは、すっごく勉強熱心なんです。どんな勉強をしているかはよくわからないのですが、とにかくみんなから、天才と言われるほど、頭がいいのです。きっと、平和な社会を作るための勉強だと思います」風来坊は、ハトの声を真似て、クック、クック、と笑った。「それは違うな～。ピースさん、人間の本性を知りませんな。戦争に勝つための勉強ですよ」

ピースは、初めて知らされた亜紀ちゃんの本性に、腰を抜かしてしまった。「え、亜紀ちゃんが、戦争に勝つための勉強をしているのですか？てっきり、戦争のない平和な社会を作るための勉強と思っていました。その話は、マジなのですか？」風来坊は、ドヤ顔で話しはじめた。「マジさ。人間と言うものは、戦争がすきなんだ。だから、世界中のどこかで、戦争している。人間社会では、戦争の勉強が、義務教育なんだ」

ホワイトレディーは、またもや、難しい話に、首を傾げてしまった。積極的なミーは、質問した。「戦争って、原爆を落とすことですか？長崎では、多くの人が原爆で亡くなりました。このような残虐なことをするための勉強ですか？いったい、何のためにそんな勉強をするのですか？殺しあって、どんな幸せが、やってくるんですか？」風来坊は、不気味な笑みを浮かべ答えた。「決まってるじゃないか。お金儲けのためさ」

ホワイトレディーは、お金のことを言われてもさっぱりわからなかった。なにがなんだかチンプンカプンで頭が混乱してしまったランが、質問した。「お金って、何ですか？人間社会では、お金があると幸せになるのですか？ハトの社会では、お金はありませんが、お互い思いやって、幸せに暮らしています」風来坊は、平和のシンボルであるホワイトレディーには、下品な人間社会のカラクリは、まったく理解できないと思った。これ以上の難しい話は、ホワイトレディーにとって、馬の耳に念仏、と判断した。

ピースは、ホワイトレディーのしかめっ面を見ていると気の毒になった。「皆さん、下品な人間の話は、この辺で切り上げて、糸島めぐりを楽しんでください。風来坊とケイスケが、案内しますので、ごゆっくり楽しんできてください。カラスさん、案内は、任せましたよ」ホワイトレディーは、糸島観光は、初めてで、しかも、イケメンのケイスケに案内してもらうことになり、翼をパタパタさせて喜びを表した。

風来坊は、自分がハトたちに好かれたと勘違いし、有頂天になってカーカーと歓声を上げた。「任せてください。ご案内するスポットは、夫婦岩、芥屋の大門、姫島です。私の後についてきてください。ケイスケは、ボディーガードだ。皆さんの後ろからついて来い。危険を察したら、即座に、知らせるんだぞ、いいな」ケイスケは、きりっと背筋を伸ばし、ドヤ顔で答えた。「ガッテンです。親分」

風来坊は、ホワイトレディーの顔色を確認し、出発の号令をかけた。「それでは、参りましょう。レッツ・ゴー」いっせいに、二羽のカラスとホワイトレディーが飛び立つと、スパイダーとピースは、行ってらっしゃい、と大きな声で見送った。風来坊は、真北に向かって、みんなを引率した。九州大学伊都キャンパスを越えると二つの岩が仲良く並んだ夫婦岩に到着した。スーが、何かを発見したときの歓喜の声を発した。「見て、大きな綱が岩と岩をつないでいるわ」

風来坊は、スピードを落とし、みんなに説明した。「あの大きな綱は、長さ30メートル、重さ１トンもある大注連縄（おおしめなわ）です。ここで見られる夕日は、“日本の夕日１００選“に選ばれています。今は、夕日は見られんが、きれいな海に夕日が映り、涙が出るほどの絶景だ」ホワイトレディーは、目をキョロキョロさせ、透き通ったエメラルドグリーンの海に見入っていた。

カラスとホワイトレディーは、低空飛行でサンセットロードを駆け抜けると、東風に乗って、芥屋の大門に向かった。ランは、ケイスケが気になっていた。ケイスケは、ラン好みのイケメンだった。「スー、ケイスケって、イケメンじゃない。彼女いるのかしら？」スーは、あきれた顔で返事した。「ケイスケは、カラスじゃないの。ハトの恋愛相手じゃないでしょ。ランたら、なに考えてるのよ」

その会話を聞いていたミキが口を挟んだ。「まったく、ランったら、いつもの一目ぼれね。カラスとの恋は、禁断の恋なのよ。いい加減にしなさいよ」ランは、いったん好きになると誰の忠告も耳に入らなかった。「なによ、いいたいほうだい言って、恋愛に、ハトもカラスもないわよ。ケイスケは、私のことどう思っているかしら？」スーは、この際、ケイスケの気持を聞いてみることにした。

「スーが、ケイスケの気持を確かめてあげる。もし、ケイスケにその気がなければあきらめるのよ」ランは、しぶしぶ、スーに確かめてもらうことにした。「それじゃ、ぶしつけに聞かないでよ。今日始めて会ったんだから。ケイスケも返事しにくいと思うから。やさしく聞いてね」スーは、最後尾のケイスケのもとに飛んでいった。

突然やってきたハトにびっくりしたケイスケは、誰か具合でも悪くなったのではないかと心配して、声をかけた。「どうかなされました？」スーは、気まずそうに返事した。「いや、たいしたことじゃないの。ちょっと、ケイスケ君に聞きたいことがあって。素直に答えてね。私たち、白いハトって、好き、それとも嫌い」ケイスケは、突然の思いもかけない質問に言葉が出なかった。

目を丸くしたケイスケを見て、スーは、改めて尋ねた。「深刻に考えなくていいのよ。率直に、白いハトが好きか、嫌いか、答えてくれればいいの」ケイスケは、嫌いじゃなかったので、素直に答えた。「好きです。白いハトは、平和のシンボルじゃないですか。だから、白いハトは、大好きです」ケイスケは、笑顔でうなずいた。スーは、ホワイトレディーの中で誰が一番好きか聞くことにした。「それじゃ、私たちの中で、一番好きなハトは？」

ケイスケは、ぽっちゃり系のスーが好きだったので、別に問題はないと思い、即座に答えた。「ちょっと、恥ずかしいな～。思い切って言います。スーさんです」スーは、どぎまぎしてしまった。自分が好きだと言われては、ランになんと言って返事すればいいのか、頭が混乱してしまった。目を丸くしているスーを見て、ケイスケは話を続けた。「スーさんが、一番好きですが、ほかのハトも大好きです。白いハトにあこがれているんです。生まれ変わったら、白いハトになりたいと思っています」

スーは、白いハトが好きなのであって、ただそれだけのことだと分かった。「要は、白いハトは、平和のシンボルだから好きってことね」ケイスケは、大きくうなずいた。「はい、平和のシンボルにあこがれているんです。黒いカラスは、人間に嫌われていますからね。白に、あこがれているんですよ」ケイスケは、ホワイトレディーが好きだと言っているわけだから、ランも好かれていることになる。それかといって、ケイスケに好かれていると言ったならば、ますます、のぼせ上がってしまうように思えた。

ランの左隣に戻ったスーは、気持を傷つけないように言葉に気を使いながら話した。「聞いてきたわよ。ケイスケ君、白いハトが好きだって」ランは、その言葉を聞いて目を輝かせた。「と言うことは、脈ありってことね。あ～、夢が膨らむわ。ゴールイン目指して、頑張らなくっちゃ」スーは、予想していた通り、ランは、勘違いしていると思った。「ね～、ラン、ケイスケ君は、特別、誰かを好きって言うのじゃなくて、平和のシンボルの白いハトが好きって言ってるの。恋愛感情じゃないのよ」

ランは、なにを言っているの、と言う顔でスーをにらみつけた。「そんなことぐらい、分かっているわよ。最初から、恋愛感情なんか生まれないわよ。小さな思いやりが、次第に、愛に変わっていくんじゃない。ランは、ケイスケ君に尽くすわ。きっと、ケイスケ君も私のことを好きになってくれると思う」このままでは、ランが禁断の恋に陥ってしまうようで、スーは不安になった。

「恋愛は、自由だと思う。でも、私たちは、ハトなのよ。しかも、平和のシンボルの白いハトよ。黒いカラスのケイスケ君とめでたく結婚できて、子供が生まれたとき、黒いハトが生まれたら、どうするつもり？黒い子供は、平和のシンボルにはなれないわよ」黒いハトと聞いたランは、一瞬、固まってしまった。黒いハトを頭に浮かべたとき、翼が動かなくなった。「大丈夫、ラン、しっかりして」スーは、落下しそうになったランを背中に乗せた。

突然、風来坊の大きな声が響き渡った。「さ～、ついたぞ。芥屋の大門だ。お、遊覧船が走っているぞ。芥屋の大門は、日本三大玄武洞の中でも最大なんだ。実に壮大だ。あの、洞窟は、高さ64メートル、開口10メートル、奥行き90メートルもあるんだ。洞窟の中も見てみるかい？」突然、ミキの悲鳴が響いた。「キャ～、怖いわ。真っ暗なんでしょ。閉所恐怖症なの。私は、遠慮するわ」

ランの声が後に続いた。「私も、怖いわ。コウモリがいたらどうするの。嫌だわ。私も遠慮するわ」そのおびえた声を聞いた風来坊は、洞窟内の見学は、取りやめにすることにした。「分かりました。それでは、姫島に向かいます。そこで、しばらく休憩しましょう。後、もう少しです。あ、東風が強くなった。この風に乗って、一気に前進だ」ホワイトレディーは、安心し、笑顔を取り戻した。

ケイスケは、遊覧船の観光客が手を振っているのを発見した。「皆さん、あの小さな遊覧船を見てください。ほら、窓から手を振っています。きっと、白いハトに手を振っているんですよ」みんなは、眼下の遊覧船に目をやった。ケイが、うれしそうに叫んだ。「やっぱ、私たちって、人気者なのね。みんな、大きな円を描いて、観光客に挨拶しましょうよ。風来坊さん、大きな円を描いてちょうだい」

数学が得意な風来坊は、瞬時に円をイメージした。風来坊は、大きな声でケイスケに叫んだ。「そこにじっとしていろ。ケイスケを中心に半径50メートルの円を描く」ケイスケがうなずき、その場で羽ばたくと、風来坊は、スピードを上げて、大きな円を描き始めた。ホワイトレディーも一列になって、風来坊の後について大きな円を描いた。眼下の遊覧船の観光客は、拍手とともに、いっせいに歓声を上げた。

　グルッと円を二周描き、ケイスケが、カーカーとさようならと言うと、ハトたちもクック、クック、とかわいい声を上げた。しばらく風に流されると、眼下に白い線を引きながら走る小型渡航船が、目に飛び込んできた。その渡航船は、岐志漁港を出発し、姫島漁港に向かう船だった。真っ白い線を引く高速船に負けまいと風来坊は、スピードを上げた。ホワイトレディーも、気持ちよくスピードを上げた。渡航船と同時に到着すると姫島の西側の堤防に着陸した。

　少し疲れたホワイトレディーだったが、パシャ～ン、パシャ～ンと打ち寄せる静かな波音に耳を傾け、心を和らげた。目を閉じて、堤防で翼を休めていると、ニャ～～ン、ニャ～ンと言うかわいい声が響いてきた。ミーが、声を発した。「ほら、見て、あんなところに子猫。ここにも、あそこにも、猫がいるわ。この島って、猫島なのかしら？」カラスもハトたちも、いっせいに、大きく目を見開き、堤防の下を覗き込んだ。そこには、20匹以上の猫が、楽しそうに戯れていた。

突然、キャ～、と言う甲高い声が鳴った。ランの悲鳴だった。「黒猫がやってくる。怖い。ケイスケ君」ランは、ケイスケに助けを求めた。漁港と防波堤を東西につなぐ細い道の中央に黒猫の姿があった。その黒猫の姿は、ゆっくりホワイトレディーに近づいていた。カワイ～猫を見ていたほかのハトたちも、黒猫の姿に気がついた。黒猫は、黒ヒョウのようにゆっくりとしかも威厳のある歩き方でホワイトレディーの目の前まで近づいて来た。ホワイトレディーは、身を寄せ震えだした。

ケイスケは、もし黒猫が攻撃してきたならば、命をかけても黒猫と闘い、ハトたちを守る覚悟で、じっと黒猫の動きを見つめた。風来坊は、近づいてくる黒猫を見て、卑弥呼女王に似ていることに気づいた。風来坊は、冷静な声でみんなを落ち着かせた。「みんな、心配することはない。あの黒猫は、お友達だ。糸島の女帝、卑弥呼女王だ」その一言に、ホワイトレディーはほっとした。ケイスケの緊張も一瞬にして解けた。

黒猫の姿は、すぐそこまでやってきた。防波堤から２メートルほどに近づいたところで、黒猫は、ぴたりと止まった。黒猫は、そこでお座りをすると話し始めた。「こんにちは、ようこそ姫島へ。私は、卑弥呼といいます。ここには、たくさんの猫たちがいますが、決して、小鳥たちを攻撃するような野蛮なことは、いたしません。この島の猫たちとお友達になってください」

風来坊は、やはり卑弥呼女王であったと、一安心した。「こんにちは、卑弥呼女王。今日は、姫島の猫たちの様子を見にこられたのですか？」卑弥呼女王は、うなずき、返事をした。「一週間に一度、姫島にやってきます。猫たちの生活ぶりの確認と、私をかわいがってくださるおじいさんとお話しするために。もし、この島のことで何かお聞きになりたいことがあれば、おっしゃってください」

風来坊は、まず、遠路はるばる長崎からやってきたホワイトレディーの紹介をすることにした。「卑弥呼女王、こちらの方たちは、今朝、長崎からやってこられた私のお友達です。糸島は、初めてということで、糸島を案内しています。すでに、つい今しがた、夫婦岩、芥屋の大門を案内しました。姫島案内を最後に、平原遺跡に戻る予定です」卑弥呼女王は、姫島を観光スポットにしてくれたことに感謝し、ほんの少し微笑んだ。

この黒猫が、糸島の女帝と聞いて、糸島に興味がわいたミーは、卑弥呼女王に質問した。「ちょっと、お聞きしますが、卑弥呼女王は、どうやって、姫島にやってこられたのですか？今の渡航船に乗って、やってこられたのですか？」卑弥呼女王は、即座に答えた。「はい、先ほど到着した渡航船です。私は、船長に気に入られ、いつも、無料で乗せていただいているのです。私は、糸島めぐりをしているうちに、多くの方たちとお友達になりました。糸島には、親切な方たちがたくさんいます。あなたたちも、糸島めぐりをして、たくさんのお友達を作ってください」

風来坊は、野村望東尼遺跡の見学を予定していたが、そのほかに、観光スポットがあるか聞いてみた。「姫島の名所と言えば、野村望東尼遺跡ですが、そのほかに何か名所はありますか？」卑弥呼女王は、名所と言われ首をかしげた。姫島は、漁業で生計を立てている漁村で、島からの眺めが絶景だと言うことぐらいしか、特に自慢できるものはなかった。確かに、海の幸は、新鮮でとても美味で自慢できることであったが、タイやサザエは、ハトたちの食事というわけには行かないと思った。

卑弥呼女王の脳裏に、ピンとひらめきが起きた。尻尾を左右に振り、笑顔で答えた。「この島には、これといった名所は、ありませんが、すぐそこに、数人の生徒しかいない小中学校があります。子供たちと遊んで見られてはいかがですか。きっと、子供たちにとって、白いハトを見るのは初めてではないでしょうか。きっと、子供たちは、大喜びです」防波堤の北側に位置する小さな姫島小中学校には、十人ほどの生徒が通っていた。

ホワイトレディーは、子供たちと聞いて、ぱっと笑顔になった。もし、島の子供たちが、長崎平和公園に行ったことがなければ、私たちのことを知らないと思った。この際、平和の大切さを知ってもらうためにも、平和のシンボルを見てもらうことは、有意義なことだと思えた。ケイが、みんなに声をかけた。「この島の子供たちに、ホワイトレディーのパフォーマンスを見せてあげましょう。子供たちは、きっと喜ぶわよ。早速、学校に行ってみましょう」

風来坊とケイスケも卑弥呼女王の提案に賛成だった。「皆さん、学校に行って、子供たちと遊んできてください。私たちは、ここで待っています」卑弥呼女王は、早速案内することにした。「皆さん、学校に案内します。私についてきてください」卑弥呼は、堤防の北側にある学校につながる小道を勢いよく駆けて行った。ホワイトレディーも舞い上がると小道の先にある茶色い屋根の学校を確認し、一気に猫を追い越し学校に飛んで行った。

ちょうどそのとき、小学生五人が校庭でサッカーをやっていた。ホワイトレディーは、校舎の屋根に止まり、しばらく子供たちを眺めていた。ミキが、疑問を投げかけた。「子供たちって、全部で五人なのかしら。寂しい学校ね。たった、五人じゃ、サーカーチームも、野球チームも、できないね。かわいそう。とにかく、私たちで、励ましましょう」ハトたちは、子供たちを喜ばせるパフォーマンスを考え始めた。

少し遅れて、黒猫が校庭の入り口にやってくると、黒猫に気づいた子供たちが、ワ～イワ～イ、と叫んで黒猫のもとに走った。ここの生徒たちにも黒猫は、人気ものだった。スーは、みんなに問いかけた。「みんなで、いつもの空中ショーをやりましょう。円を描いたり、急降下したり、旋回したり、それぞれ、得意な技を披露しましょう。どう？」全員、よっしゃ、と気合を入れるとグランドの上空に舞い上がった。

ホワイトレディーが、グランドの上空に現れると、「白いハト、白いハト、五羽もいる」と子供たちの叫び声が校庭に響き渡った。一人の男子が、叫んだ。「白いハト、俺、はじめて見た。かっけいいな～」ホワイトレディーは、早速得意の飛行を始めた。ミーは、高く舞い上がって、らせん状に急降下した。ケイは、回転しながら、急降下を始めた。ランは、大きな円を描き、グランドの中心に向かって徐々に小さな円を描いていった。スーは、グランドすれすれに低空飛行をやった。ミキは、縦の八の字を描がき、さらに、横の八の字を描いた。

空中飛行を窓から見ていた先生や中学生たちも大きな歓声を上げ、拍手をした。空中ショーを終えたホワイトレディーは、校舎の屋根にきれいに並んで止まり、クック、クック、とさえずりながら得意のラインダンスを披露した。子供たちの拍手は、しばらくやまなかった。子供たちは、大きく手を振り、また来てね～、といっせいに叫んだ。ホワイトレディーは、右の翼を振って、さよならを言うと、大空に舞い上がった。

歓迎パーティー

小学校二年生の授業は、１時半に終了し、亜紀のクラスは、ＰＣの電源をオフにして下校を開始した。ほとんどの生徒は、下校後、何らかのレッスンを受けていて、亜紀も水曜日には、今宿スイミングクラブで50分間のトレーニングをして帰宅していた。でも、亜紀は、昨日、風来坊のお友達の五羽の白いハトが長崎からはるばるやってくることをピースから聞かされていた。だから、白いハトを歓迎するために、今日は、ハトのえさを買ってなるべく早く帰宅することにしていた。

亜紀が、席を立って、帰りかけたとき、秀樹が声をかけてきた。「今日も、スイミング？」亜紀は、顔を左右に振って返事した。「今日は、まっすぐ帰る。長崎から、お友達が来るから」秀樹は、うらやましそうに尋ねた。「長崎から？以前、長崎に住んでいたの？」亜紀は、くすっと笑って、返事した。「そうじゃないの。友達って、人じゃないの。びっくりしないでよ。お友達って、ハトなのよ。遠路はるばる、長崎平和公園からやってくるのよ。だから、歓迎パーティーをやってあげようと思ってるの」

秀樹は、ハトと聞いて、金魚のようにぽかんと口を開けた。内心からかっているのではないかと思ったが、変に疑って、嫌われてはいけないと話をあわせることにした。「へ～、亜紀は、カワイ～から、お友達が多いんだね。ハトって、あの空を飛ぶハトだよね。どうやって、友達になったんだい？」亜紀は、秀樹がこんなに気遣ってくれる男子とは思わなかった。いつも、金持ちとか、サッカーが得意だとか、カラオケが上手だとか、自慢話ばかりして、嫌な感じの男子と思っていたが、気遣う一面にふれて、ほんの少し、心を許せる気がした。

「信じられないと思うけど、実は、そのハトって、カラスのお友達なのよ。カラスを通じて、ハトとお友達になったの」秀樹は、開いた口がふさがらなかった。からかうにしても、ここまで、作り話をしなくてもいいんじゃないかと思った。この話だと、亜紀ちゃんは、カラスともお友達ってことになる。いくらなんでも、カラスと友達になるなんてありえないと思った。

「カラス？カラスを通じてってことは、亜紀は、カラスとも、お友達ってことになるけど、どうやって、カラスと友達になったのさ」亜紀は、クスクス笑い出した。まったく冗談のような話だから、この辺で冗談だと言おうかと思ったが、この際、怒り出すまで話すことにした。「カラスはね、家に飼っている猫の友達なの。つまり、猫とカラスと亜紀は、友達ってこと。分かった？」

　もはや、あきれて何もいえなかった。冗談にしても、ここまで、冷静に話されると、怒りがこみ上げてこなかった。「そうなのか。とにかく、亜紀は、カワイ～から、友達が多いってことだよね。お友達って、ハトだろ、歓迎パーティーって、どんなことやるんだよ」亜紀は、ハトのえさを買う話をすれば、怒りがおさまるんじゃないかと思った。「大それたことじゃないのよ。ハトにエサをあげるだけよ」

　秀樹は、やっと、気持のもやもやが、消えた気がした。ハトにエサをやるだけのことだとわかり、話を盛り上げることにした。「ハトのえさって、ポップコーンみたいなもの？」亜紀は、今からの計画を話すことにした。「ハトのエサを今から買いに行くの。ハトにおいしいエサを食べさせて、ハトさんに喜んでもらおうと思ってるの。ペットショップのおじさんに聞いて、買う事にする」

秀樹は、亜紀に気に入られる絶好のチャンスと思い、ペットショップについていくことにした。「そうか。ペットショップに行くんだったら、僕の車で行けばいいさ。僕は、亜紀のお供をするから」秀樹は、いつも、ベンツの送り迎えで、通学していた。亜紀は、ちょっと、ためらったが、西新のペットショップに行くには、地下鉄を降りて歩かなければならなかったので、この際、秀樹を利用することにした。

亜紀は、上目づかいでささやいた。「それじゃ、乗せてもらおうかな～？」秀樹は、笑顔で返事した。「いいとも、車は、もう着いているはずだ。さあ、行こう」秀樹と亜紀は、送り迎え専用の駐車場に向かった。二人が駐車場に行くと、初老の運転手がベンツのボンネットを磨いていた。秀樹に気がついた運転手は、愛想のよい軽やかな声で、挨拶をした。「お坊ちゃん、お待ちしていました」運転手は、亜紀を見て首を傾げたが、笑顔を二人に向けた。

「ジー、今日は、ちょっと、寄り道をして帰る。いいだろ」運転手は、女子を送るつもりだと察知した。「分かりました。お嬢さんをお送りすればいいのですね」秀樹は、了解してくれてほっとしたが、さらに、西新のペットショップの話をした。「ちょっと、ペットショップによってほしいんだ。亜紀は、ハトのえさを買いたいんだってさ。西新にあるそうなんだ。行ってくれるだろ」

運転手は、即座に笑顔を作った。「もちろんです。ペットショップですね。ナビで調べれば、すぐに分かります。それでは、お乗りください」運転手は、後部のドアを開けた。秀樹は、先に、亜紀を乗せて、その横に腰掛けた。運転手が、ドアを閉めたとき、亜紀とデートしているようで、秀樹の心臓はバクバクし始め、顔が真っ赤になった。運転手が、参ります、と言うとハイブリットのベンツが静かに動き出した。

亜紀は、ペットショップの場所を指示しようと思ったが、ナビにしたがって行ってもらうことにした。10分もするとペットショップに着いた。運転手は、駐車場にベンツを入れると、さっと降りて、亜紀が座っている方の後部ドアを開けた。「つきました。ここで待っていますので、ごゆっくりお買い物をなさってください」にやっとした秀樹は、先に降りるとすばやく反対側のドアに回りこみ、亜紀が降りるのを笑顔で待った。亜紀は、一人で買いものをしようと思っていたが、金魚のフンのように秀樹は後ろからついてきた。

亜紀は、店内に入り、カウンター横に立っていた店員に声をかけた。「ハトのえさをください」店員は、ハトのえさを持ってくるとカウンターに置いた。「それと、ドッグフードがほしいのですが、とびきりおいしいのをください」店員は、高級な牛肉で作られたドッグフードを手に取ると、駆け足で戻ってきた。店員は、会計をした。「合計で、8580円です」亜紀は、えさがこんなに高いとは思わなかった。きっと、ドッグフードが高いのだと思った。財布の中の5000円札を見つめ、ちょっと、首をかしげた。

そのとき、秀樹が店員に声をかけた。「ちょっと待ってください」秀樹は、店を出ると駆け足で運転手を呼びに行った。「ジー、エサの代金を払ってくれ。いいだろ」買い物を任されている運転手は、笑顔で、はい、と返事をした。小走りにカウンターにやってきた運転手は、内ポケットから財布を取り出し、秀樹専用カードでえさの代金を支払った。亜紀は、何と言っていいか分からず、とっさに、ありがとうございます、と言ってしまった。

　亜紀は、肩をすぼめてしまった。エサの代金で秀樹に借りを作ってしまい、なんとなく惨めになってしまった。「家に帰ったら、お返しします」亜紀は、言葉を付け加えたが、運転手は、笑顔で返事した。「気にしなくて、いいんですよ。お坊ちゃんからのプレゼントです。さあ、参りましょう」運転手は、秀樹と亜紀の背中を押して、自動ドアを出た。二人を後部座席に乗せたベンツは、亜紀の自宅に向かった。

　亜紀の自宅前の道路にベンツが到着すると、聞きなれないエンジン音をキャッチしたスパイダーがワンワンと吠えた。スパイダーの声にびっくりして跳ね起きたピースが、ベランダに飛び出した。夕食の準備をしていたアンナも宅急便ではないかと思い、ベランダに出た。アンナは垣根の入り口に目をやると、入り口前にシルバーのベンツが止まっていた。入り口には、最近ちょくちょく遊びにやってくる秀樹と亜紀の姿があった。亜紀は、落ち込んだ顔で頭を下げていた。

アンナは、エプロン姿のままで駆けていき、声をかけた。「お帰り、亜紀、送っていただいたの？」亜紀に声をかけるやいなや、ベンツに目をやった。アンナの姿に気づいた初老の男性が、運転席から降りてくるとアンナに挨拶した。「こんにちは。秀樹お坊ちゃんが、お世話になっています」アンナは、送ってもらったことに恐縮し、お礼を言った。「こちらこそ、送っていただきまして、ありがとうございます。亜紀、ちゃんと、お礼を言ったの？」亜紀は、すでに、何度もお礼を言っていたので、ほんの少し、イラッとしたが、笑顔を作り、改めて、ありがとう、とお礼を言った。

運転手と秀樹に頭を下げたアンナと亜紀は、ベンツが消えるまで手を振って見送った。亜紀は、ペットショップでえさ代を運転手に支払ってもらったことを話すべきだと思ったが、秀樹のプレゼントだと思った瞬間、そのことを話したくなくなった。亜紀に小さな秘密ができたとき、亜紀の顔がポッと赤くなった。うつむいた亜紀は、とっさに、アンナを置いてベランダでお座りをしているピースのもとに駆けて行った。

姫島を飛び立った二羽のカラスとホワイトレディーは、二時半ごろ平原歴史公園に到着し、ヤマモモの木の下で、亜紀が帰ってくるのを待っていた。3時前に帰宅した亜紀は、ハトたちの歓迎パーティーを歴史公園ですることをピースに伝えた。ピースは、早速、公園で待っているカラスとホワイトレディーにパーティーのことを伝えに行った。亜紀は、アンナに知られないように、こっそりパーティーの準備に取り掛かった。

犬、猫、ハト、カラスのエサと飲み物と、自分が食べるサンドイッチとオレンジジュースをキャリーバッグに詰め込み、こっそり、それを玄関前に置くと、キッチンからアンナに声をかけた。「ママ、ちょっと、公園に行ってくる」夕食の準備を終え、リビングで福岡モーターショーの予告ニュースを見ていたアンナは、いつもの返事をした。「暗くならないうちに帰ってくるのよ。分かった」亜紀は、大きな声で、ハ～～イと返事すると、スパイダーを連れて公園に向かった。

　ポッポッポ～、ハトポッポ～、豆がほしいか、そらやるぞ、みんなでいっしょに、食べに来い。ポッポッポ～、ハトポッポ～、豆はうまいか、食べたなら、みんなでなかよく、遊ぼうよ。亜紀のカワイ～声が、公園まで流れた。イエローのキャリーバッグを引いてくる亜紀を確認した風来坊は、ホワイトレディーに声をかけた。「みんな、お友達の亜紀ちゃんだ。ベンチのところに行こう」カラスとホワイトレディーは、小さく羽ばたき、ベンチの前に集合した。

　白いハトたちに気づいた亜紀は、右手を大きく振りながら、笑顔で声をかけた。「ヤッホ～、お待たせ～」ベンチに到着した亜紀は、キャリーバッグをベンチの前に立て、詰め込んでいたご馳走を取り出し、ベンチの座席に並べた「みんな、お腹すいたでしょう。今から、パーティーよ」亜紀は、五羽の白いハトには、ペットショップで買ったハトのエサ、カラスにはポップコーンと食パン、ピースにはキャットフード、スパイダーにはスペシャルドッグフードをお皿に盛り付けると、それぞれをベンチの前に並べた。

「みんな、食べていいわよ」カラス、ハト、猫、犬、いっせいに、イタダキマ〜〜スと言って、お皿に顔を突っ込んだ。さらに、亜紀は、ミネラルウォーターを三つのお皿に注ぎ、カラスとハトたちの前に一つ、ピースの前に一つ、スパイダーの前に一つ、こぼさないようにゆっくり置いた。

ダイエットをしている少食のホワイトレディーは、いち早く食事を終え、ご馳走さま、と言った。風来坊とケイスケたちは、大きなくちばしで、食パンをパクパク食べていた。スパイダーは、ドッグフードがなくなっても、お皿を舐めまわしていた。ピースは、小さな口で、上品にキャットフードを少しずつ味わうように食べていた。亜紀もハムサンドを口にほう張り、もぐもぐさせて、ゆっくり食べた。

風来坊とケイスケたちは、山盛りの食パンをたいらげ、満足げな笑顔でご馳走さま、と言った。スパイダーは、まだ食べたりないと言った顔つきで、ご馳走さん、と言った。ピースは、右手で口を拭きながら、かわいらしい声で、ご馳走さま、と言った。最後に、亜紀が、ジュースをゴクンと飲み下し、ご馳走さま、と言った。久しぶりのご馳走にありつけて、お腹を押さえていた風来坊は、ホワイトレディーの笑顔を見たとき、彼女たちの紹介を忘れていたことに気づき、自己紹介させることにした。

「みんな、自己紹介をやってくれないか」風来坊がホワイトレディーにお願いすると、彼女たちは、顔を見合わせて、ミーから自己紹介することにした。「私は、ミーと言います。長崎平和公園からやってきました。いつもは、隣のケイと一緒に観光客相手にモデルをやっています。次はケイ」ケイが、少し緊張したのか甲高い声で話しはじめた。「私は、ケイです。長崎生まれの長崎育ちです。糸島に招待してくれて、ありがとう。そいじゃ、次は、ラン」

目を丸くしたランは、小さな声で話しはじめた。「私は、ランです。浦上天主堂からやってきました。三姉妹の長女です。次は、スーね」ぽっちゃりのスーは、落ち着いた低い声で話しはじめた。「次女のスーです。ガッツがとりえで、旅行が大好きです。はい、ミキ」ぶりっ子のミキは、首を傾げて、話しはじめた。「私は、三女のミキです。カワイ～とみんなから言われます。エヘヘ」亜紀は、遠路はるばるやってきてくれたハトたちに、拍手を送った。「皆さんは、すばらしいわ。観光客相手に、毎日、平和を訴えているんだもの。これからも頑張ってください。

そうだ。ピースとスパイダーも自己紹介しなくっちゃ。はい、ピースから」突然振られたピースだったが、大人の色気を出しながら、自己紹介した。「私は、ハリウッド女優のピースと申します。生まれはロサンゼルスで、かつての主人の仕事の関係で、日本につれてこられました。ところが、帰国の際、飼い主は私を日本に置いて帰国してしまいました。ニャ～ンニャ～ン泣き崩れて、途方にくれていたとき、やさしい、亜紀ちゃんに拾われました。今は、幸せな日々を送っています。はい、スパイダーどうぞ」

人前で話すのが苦手なスパイダーは、照れくさそうに話しはじめた。「あの～、僕は、スパイダーと言います。赤ちゃんのときから亜紀ちゃんに育ててもらいました。毎日、おいしいドッグフードを食べさせてもらい、かわいがってもらっています。得意なことは、食べることと吠えることです。よろしく」スパイダーが話し終えると、ピースがケラケラ笑った。ピースは、亜紀の自己紹介を促した。「亜紀ちゃんもどうぞ」

亜紀は、満面の笑顔で話しはじめた。「私は、動物とお話するのが大好きな亜紀といいます。小学校二年生です。得意な教科は、ロボ工学です。苦手な教科は、体育です。将来は、戦闘機のパイロットになりたいです。好きなゲームは、戦争ゲームです。動物と話していると、ママから、ブツブツ独り言はやめなさい、とよく言われます。でも、これからも、もっともっと、動物とお話したいと思います。よろしく」

亜紀の将来の夢を聞いて、ちょっと気になったランは、亜紀に質問した。「亜紀ちゃん、私たちは、平和のシンボルとして、頑張っているんだけど、いつまでたっても、戦争はなくならないのよ。人間は、戦争に勝つことによって、幸福になれると思っているみたいだけど、原子爆弾で多くの人を殺して、いったい、誰が幸せになったんだろうね。亜紀ちゃんの幸福って、やっぱり、戦争に勝つことなの？」

亜紀は、みんなを守るために戦闘機のパイロットになりたかった。でも、守ると言うことは、戦争に勝つことで、多くの人を殺すことだと気づかされた。返事に困った亜紀は、しばらく、黙り込んでしまった。亜紀を助けるようにピースが話しはじめた。「亜紀ちゃんは、純粋に幸福を望んでいると思う。子供は、みんな、戦争なんて、いらないと思っているのよ。バカなのは、大人なのよ。人間は、大人になるにしたがって、幸福と言うのが、分からなくなってしまうのよ。亜紀ちゃん、大人には、ならないよね」

亜紀の目からは、涙がこぼれた。子供は、いずれ、大人になる。そして、戦争をするバカになってしまう。子供が、大人にならなくてすむ方法があるのだろうかと思ったが、どんなに、抵抗しても、大人になってしまうように思えた。突然、風来坊が、大声で話しはじめた。「みんな、人間ばかりを責めてはいけない。地球に住んでいるのは、人間以外に、動物や植物もいるんだ。そうさ、俺たちがいるじゃないか。亜紀ちゃんを助ければいいじゃないか。平和のために、亜紀ちゃんと一緒に頑張ればいいじゃないか。な～、みんな」

亜紀の脳裏に、突如、原爆を投下している戦闘機が浮かんだ。その戦闘機のパイロットは、亜紀だった。亜紀の体は、震えだした。亜紀は、正義と思っていた自分の夢が怖くなった。そして、自分に言い聞かせた。人を殺しても、幸福にはなれない。たとえ、原爆を投下されようとも、反撃のために、武器を持ってはいけない。話し合えば、きっと分かり合える。もっと、もっと、友達を増やせばいい。世界中の人たちが、すべて友達になるまで、友達作りをしよう。動物たちの思いやりを感じたとき、亜紀の目から涙は消えた。